

ゼミナール 訪問



PICK UP STUDY

「江村ゼミナール」

子ども発達学部



REPORT

幼児期・児童期から 土とふれあう時間を持つことは 心と体、社会性をも育みます。

子ども発達学部 子ども発達学科
えむら かずひこ

江村 和彦 准教授



研究テーマ

ふれる、つくる、あそぶを
子どもと共有できる実践者をめざす

江村ゼミには、保育者や教員を目指す学生が所属しています。ゼミ活動は保育、教育について座学、実践を交えて学んでいます。2017年は「ふれる、つくる、あそぶ」をテーマにさまざまな保育園、幼稚園、施設などで活動してきました。特に夏季休暇には子どもたちと粘土の泥にまみれたり、工作のお手伝いで舟をつくったり、親子のふれあいに参加したり、盛りだくさんの毎日でした。活動範囲も阿久比町、美浜町、知多市、尾張旭市など広範囲にわたっています。その中で、学生たちは子どもたちとさまざまな素材にふれて、つくって、遊びながら学んでいます。

学びのポイント

まずは自分が夢中になる、楽しむ！

江村ゼミのポイントは、さまざまな素材にふれて遊びこむことです。まず自分自身が遊びの中で夢中にならなければ、子どもたちにその良さは伝わりません。知識だけでなく、経験として遊びの中から学びます。

STEP.1 | 3年前期

保育、教育現場で必要な経験として、さまざまな造形素材にふれて、その特性を学ぶ。保育園、施設などで子どもたちと造形遊びを楽しむ。

STEP.2 | 3年後期

グループで造形ワークショップを計画し、保育園で実践。さらに造形素材について研究を深めます。

STEP.3 | 4年

卒業研究として、自分自身が深めたい素材をもとに制作したり、保育園などで実践を重ね、子どものつくる、遊ぶは何かを追究する。

VOICE

子どもたちと一緒に 遊びながら学ぶ。

ゼミでは主に保育園などに訪問し、江村先生が考えた遊びを園児たちと一緒にしながら、子どもとの接し方を実践的に学びます。同じ遊びでも子どもたちの反応はさまざまなので、一緒に楽しむだけでなく、全体に目を配り、一人ひとりの言葉や個性も理解した声かけが大事だと実感しました。今回、集大成として保育園で卒業発表をさせてもらったのですが、私が制作したのはオオカミと七匹の子ヤギの布芝居。みんなに参加してもらえるようにナレーショ

ン部分をセリフにして問いかけたり、ポケットなどの仕掛けを盛り込むなどいろいろ工夫した甲斐あって、予想以上の反応が見られてホッとしました。江村先生はいつもで親身になって話を聞いてくれるので、卒業制作でもたくさんアドバイスをもらいましたし、ゼミ生みんなのお父さんの存在です(笑)。卒業後は保育士として働くので、この経験を活かし、園児をはじめ保護者や先生にも親しみを持ってもらえる保育士になりたいです。

きとう みほ
鬼頭 未歩さん

子ども発達学部 子ども発達学科4年
愛知県 / 中村高校出身



ダイナミックな粘土遊びは、 子どもたちの感覚を研ぎ澄ませます。

幼児期、児童期の土粘土遊びに注目して、保育園や小学校などで造形あそびの実践研究を重ねています。幼児期の粘土遊びの素材として、油粘土や紙粘土などがありますが、なかでも天然の土からなる土粘土はその感触の心地よさや可塑性によって、何度も繰り返し遊ぶことができる素材として使われます。しかし、土粘土の扱い方、管理の難しさから近年では大きな土粘土遊びをする機会がなくなってしまっている保育園がほとんどです。そこで、土粘土の粉から水を入れて感触の変化を楽しみながら遊んでみたり、大量の土粘土で踏んだり、転がしながらさまざまな遊びを実践提案するために保育園へ足を運んでいます。その一連の活動の中で、体全体を使ってダイナミックな粘土遊びをすることが、子どもたちの心と体も開放できる遊びであり、造形遊びを通して幼児期の非認知能力発達についても有効であるからです。子どもたちのさまざまな感覚を刺激する体験が減っている中、感触をたのしむ遊びの素材として粘土は最適なのです。この土粘土の粉を用いた感触遊びを土粉(つちこ)遊びと呼び、粘土の粉の状態から、粘土、ペースト、泥、泥水と変化していきます。子どもたちは遊びの中で、どの状態でも遊べるように自分自身が心地いい感触を見つけ、自分で選べる自由さを含んだ活動になっています。この全身を使って粘土に親しむ活動は、幼児期に必要な触覚体験であり社会性を養う遊びにもなっていると考えます。この活動は現在、知多半島では美浜町、阿久比町の保育園を中心に活動しています。今後はさらにつながりを広めていければと考えています。

土を使った器やオブジェを制作し、 芸術の意味を問う。

もうひとつの専門分野は陶芸です。陶芸はその土の種類で陶器や磁器などに分かれ、成形方法や釉薬、焼成方法によってさまざまな表情を見せます。その魅力に惹かれ30年近く制作を続けています。制作は陶器、磁器、土鍋などの食器と、ロボットや恐竜のオブジェに分かれて多種多様に展開し、年に1回程度の個展と数回のグループ展に出展しています。食器制作で頭脳においては、抹茶茶碗や花器のようなありがたい器で

はなく、今の自分たちの器をつくることです。日本は他の国には例を見ない多彩な食器使いで食卓を彩ります。それは茶道の影響と四季の豊かさにあると考えます。季節の食べ物より一層おいしく食べるために、それを装う器に神経を注いできたのです。その流れをくむ現代の私たちの食生活は、和食、洋食、中華その他さまざまな多種多様になっています。家庭で使う食器もこれらの食事に対応しなければならないと考え、実際に料理を盛り付けながら器づくりをしています。一方でロボットや恐竜のオブジェ制作については、子どもが粘土遊びをするように思うがままにつけています。制作しているロボットの形は、レトロフューチャーをテーマに、どこか懐かしい形、映画やアニメに出てきたような雰囲気を感じています。作品は紐づくりと呼ばれる縄文土器から現代までつづく技法で作り、中は空洞になっています。その空洞に意味があります。私は、その中に作品への思いを込めていると言えます。土偶やお地藏さんのような現代の祈りの形の再現といえるかもしれません。恐竜については、子どものころから興味関心があり、今でもさまざまな形の恐竜の骨格標本を見に博物館をめぐるしています。どのような暮らしをしていたのか、体や羽毛の色はなどと想像する楽しみがあり、未知のものに対する憧れや好奇心が創作意欲を掻き立てます。私の制作は、生活の役に立つものとしての器、直接何かの役に立つものとはいえないオブジェの間を行ったり来たりしています。役に立つ、立たないとはどういうことか。そこに芸術の意味があると考え、土に向かい続けられています。

